

医論129

論 文 要 旨

論 文 題 目

Risk of Stroke in Relation to Level of Blood Pressure and Other Risk Factors in Treated
Hypertensive Patients

(高血圧患者における脳卒中発症前の降圧治療と危険因子)

氏名 石田百合子 

【目的】近年、脳卒中による死亡率は減少してきたものの、未だ我が国の死因の第二位を占めている。高血圧は脳卒中の最大の危険因子であるが、治療中の高血圧患者の血圧値は未だ高く、その他の心血管危険因子を合併していることが多い。本研究では、高血圧患者における脳卒中発症前の降圧治療中の血圧値と危険因子について検討する。

【方法】過去6年間（1988～93年）に脳卒中を初回発症して国立循環器病センターの脳卒中集中治療室に入院した患者のうち、発症前に1年以上同施設の外来で降圧治療を受けていた者126名（S群；男74名、女52名、平均年齢70.9歳）と、S群と同様に降圧治療を受けていて、S群の個々の患者と年齢、性を対応させた脳卒中の既往がない高血圧患者126名（C群）の1年間の血圧の経過、代謝指標等を比較検討した。

【結果】高血圧の罹病期間、飲酒および喫煙歴、心電図上の高電位はS群、C群間で有意

な差はなかった。また、脳卒中発症前1年間の外来血圧の平均も差はなかった。しかしS群の収縮期血圧の平均は148.7 mmHgで、C群のそれより2.5 mmHg高くなっていた。特に69歳以下においてはその差は有意であった（S群150.5 mmHg、C群144.0 mmHg）。また、70歳未満では脈圧もC群に比しS群で有意に高かった（S群65.8 mmHg、C群59.6 mmHg）。収縮期血圧が160 mmHg以上を占める割合は、全年齢および70歳以上では差はなかったが、70歳未満ではS群がC群に比し有意に高率であった（S群25.5%、C群7.4%）。S群において、発症1ヶ月前の外来血圧は発症前1年間の外来血圧の平均と有意な差はなかった。S群のうち脳出血を発症した群は、他の病型に比し拡張期血圧が高かった（脳出血群87 mmHg、ラクナ梗塞群81 mmHg、アテローム血栓性梗塞群82 mmHg、心源性塞栓群82 mmHg、

分類不能の梗塞群 (79 mmHg)。S群はC群に比し空腹時血糖が有意に高かった。また、HDLコレステロール値は低く、血清クレアチニン値は高い傾向にあった。S群はC群に比し糖尿病、タンパク尿、心房細動を合併している割合が高く、抗血小板療法や抗凝固療法を受けている割合も高かった。

【考察】脳卒中非発症患者の血圧に比し脳卒中初回発症の高血圧患者の血圧は、70歳未満では有意に高かった。またタンパク尿を呈する割合が高いなど他の臓器障害を合併していた。高血圧患者の脳卒中一次予防には、血圧管理を十分に行うとともに血糖値やHDLコレステロールなどの代謝指標の管理も重要であることが示唆された。降圧薬の種類や抗血小板療法との関連については今後さらに検討が必要であると考えられる。

論文審査結果の要旨

報告番号	* 課程博 論文博	第 号	氏名	石田百合子
論文審査委員		平成 13年 12月 20日		
		主査教授	有 泉 誠	
		副査教授	古謝 景春	
		副査教授	山根 誠又	
(論文題目) Risk of stroke in relation to level of blood pressure and other risk factors in treated hypertensive patients				
(論文審査結果の要旨) 上記論文に関して、研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。				
1. 研究の背景と目的 近年、脳卒中による死亡率は減少してきたものの、未だ我が国の死因の第三位を占めている。高血圧は脳卒中の最大の危険因子であるが、治療中の高血圧患者の血圧値は未だ高く、その他の心血管危険因子を合併していることが多い。そこで、脳卒中を初めて発症した高血圧患者の発症前の血圧や他の危険因子を、発症していない高血圧患者と比較し、脳卒中の一次予防のために適切な治療方法について検討することを目的とした。				
2. 研究内容 1988～93年の間に脳卒中を初回発症して国立循環器病センターの脳卒中集中治療室に入院した患者のうち、発症前に1年以上同施設の外来で降圧治療を受けていた連続症例126名(S群;男74名、女52名、平均年齢70.9歳)と、S群と同施設で同時期に降圧治療を受けていて、S群の個々の患者と年齢、性を対応させた脳卒中の既往がない高血圧患者126名(C群)の発症前1年間の血圧の経過、代謝指標等を比較検討した。				

- 備考 1 用紙の規格はA4とし縦にして左横書きとすること。
2 要旨は800-1200字以内にまとめること。
3 *印は記入しないこと。

高血圧の罹病期間、飲酒および喫煙歴、心電図上の高電位にはS群、C群間で有意な差はなかった。また、脳卒中発症前1年間の収縮期血圧の平均はS群149 mmHg、C群146 mmHgであったがその差は有意ではなかった。しかし70歳未満においてはその差は有意であった（S群151 mmHg、C群144 mmHg）。収縮期血圧が160 mmHg以上を占める割合は、全年齢および70歳以上では差はなかったが、70歳未満ではS群がC群に比し有意に高率であった（S群25.5%、C群7.4%）。拡張期血圧は両群で差がなかった。S群において、発症1ヶ月前の外来血圧は発症前1年間の外来血圧の平均と有意な差はなかった。S群のうち脳出血を発症した群は、他の病型に比し拡張期血圧が高かった（脳出血群87 mmHg、ラクナ梗塞群81 mmHg、アテローム血栓性梗塞群82 mmHg、心源性塞栓群82 mmHg、分類不能の梗塞群79 mmHg）。S群はC群に比し空腹時血糖が有意に高かった。また、HDLコレステロール値は低い傾向にあった。また、S群はC群に比し糖尿病、タンパク尿、心房細動を合併している割合が高く、抗血小板療法や抗凝固療法を受けている割合も高かった。

脳卒中初回発症の高血圧患者の血圧は、脳卒中非発症患者の血圧に比べて70歳未満では有意に高かった。また臓器障害や糖尿病などの他の危険因子を合併している割合が高かった。高血圧患者の脳卒中一次予防には、高血圧性臓器障害を評価して血圧管理を十分に行うとともに血糖値などの代謝指標の管理も重要であることが示された。

3. 研究成果の意義と学術的水準

本研究は、治療中の高血圧患者における脳卒中初回発症のリスクを検討するための症例対照研究である。一施設において1年以上降圧治療を受けていた多数の患者のなかで、脳卒中を発症した90%以上が同施設の脳卒中集中治療室に入室しており、均質かつ継続的な観察が可能であった。脳卒中発症予防のための降圧レベル、他の危険因子の管理など重要な示唆に富む成績が得られた。また、脳卒中発症1ヶ月前と1年間の外来随時血圧の比較は知見が少ないが、直近の血圧変動の関与は小さいものと考えられた。これらの研究成果は国際的に認められる水準にあるものと判断される。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。